

## 所謂喰腎血蝨症の 2 例

石川 道雄

名古屋大学医学部解剖学教室

(昭和 33 年 11 月 15 日 受領)

H. Miyake & J. Scriba (1893) が初めて日本人の血尿繊維乳糜尿患者の尿中からダニ類の虫体を発見し、それを腎内に寄生する喰腎血蝨 *Nephrophagus sanguinarius* と命名して報告した。その後尿中のみならず糞便、胆汁、喀痰中からも本蝨が証明され、その臨床報告例は多い。本蝨が寄生的病原性を有するか否かについては今日に到るも、なお明らかでない。私は最近本蝨の腸内寄生の 2 例を経験し、その寄生的病原性を検討し、いささか所見をえたので報告する。

## 症 例

## 症例 1.

青〇信〇, 20歳(昭和12年5月生), 男, 齒科医科大学生, 下宿地, 千葉県市川市, 帰郷地, 名古屋市西区

初診: 昭和33年8月16日。

家族歴: 同胞5人(♂♂♀♂♀)中の次男で、父は再生不能性貧血で、昨年49歳で死亡し、母は目下腎炎で治療中である。兄は次例のように本症に罹患する。妹、弟は健在である。

既往症: 本年2月鉤虫の完全駆除をする。

主訴: 時々右側腎臓部の鈍痛、心悸亢進、常時軟便で肥えられない。

現症: 体格中等、栄養中等、皮膚に貧血の特徴はない。舌は潤、舌苔はない。頸腺は小豆大に触診できる。胸部は異常ない。腹部は廻盲部にグル音を聴取するほかに著変はない。臍反射は正常、血圧は最高 120mmHg 最低70mmHg である。

尿: 蛋白(+), 糖(-), ウロビリノーゲン(+), 比重1025, 沈渣: 少量の赤血球, 白血球, 多数の上皮細胞の他に、生きた喰腎血蝨をみる。

MICHIO ISHIKAWA: Two cases of so-called nephrophagiasis (Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagoya University)

糞便: 有形、軟便で塗抹で生きた所謂喰腎血蝨及びその虫卵を多数認めた。潜血反応は陽性である。

血液: 赤血球数415,000, 白血球数7,600, 白血球百分率: 好中球38% (後骨髓球1%, 桿状型11%, 分節型26% (Ⅱ11%, Ⅲ11%, Ⅳ4%)), 好酸球2%, 単球5% リンパ球55% (大9%, 小46%)。

## 症例 2.

青〇一〇, 22歳(昭和10年9月生), 男, 齒科医科大学生, 住所は第1例と同じ。

初診: 昭和33年8月17日。

家族歴ならびに既往症: 第1例の兄で、時々扁桃腺炎に罹患する以外は著患はない。

主訴: 自覚症状はない。

現症: 体格中等、栄養良、皮膚に貧血の特徴はない。舌潤、舌苔はない。胸部、腹部、反射に異常がない。

尿: 蛋白(-), 糖(-), ウロビリノーゲン(+), 比重1023, 沈渣: 少量の上皮細胞がある。

糞便: 有形、固く、消化は不良で、生きた所謂喰腎血蝨ならびに多数の虫卵を認めた。潜血反応は陽性である。

血液: 赤血球数490,000, 白血球数7,900, 白血球百分率: 好中球59.5% (桿状球9%, 分節型50.5% (Ⅱ18% Ⅲ17.5%, Ⅳ14%, Ⅴ1%)), 好酸球1.5%, 単球1.5%, リンパ球37.5% (大4%, 小33.5%)。

## 両症例の経過

第1例は尿及び糞便、第2例は糞便から夫々生蝨を発見したので、先づ経口感染の疑をもつて、昭和33年8月17日、摂取食物の嚴重なる調査を行つた。その結果、白味噌の中に本蝨の成虫、幼虫ならびに卵を発見した。そのため、その味噌を廃棄し、食器の嚴重な消毒を行つた。以後、食物その他に含蝨しないことを確めた。

その後の糞便ならびに尿中の出現の状況は第1表に示



第 1 表

月 日	第 1 例		第 2 例	
	糞便	尿	糞便	尿
8 19	+	+	+	-
8 20	+	+	+	-
8 21	+	+	+	-
8 22	+	+	+	-
8 23	+	+	+	-
8 25	+	+	-	-
8 26	-	+	-	-
8 27	-	+	-	-
8 29	-	-	-	-
9 1	-	-	-	-
9 3	-	脚節	-	-
9 5	-	-	-	-
9 8	-	-	-	-

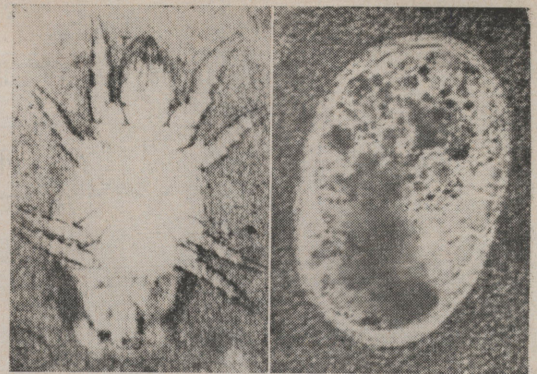
すように減減した。この間、両患者の便通は夫々1日1行、又駆虫剤は投与されていない。

考 按

三宅・Scriba が発見提唱した *Nephrophagus sanguinaris* は岸田 (1923) によると、動物学上 Tarsonemidae に属するもので *Tarsonemus sanguinarius* であるという。所謂喰腎血蟲として人尿、人糞その他に出現する蟲は次のようである。即ち尿中からは Trasonemidae [(i) *T. sanguinarius* Miyake et Scriba 1893, ii) *T. lattissimus* Kishida 1923, iii) *T. hominis* Dahl]); Tyloglyphidae (i) *T. longior*, ii) *T. ovlatus var minor* Kishida 1923, iii) *T. farinae*]; *Carpoglyphus alienus* T.d, Haan 1906, *Tetranychina tuberculata* K. Kishida, *Cnemidocoptes mutans* が認められ、糞便中からは *Glyciphagus domesticus*, *Glyciphagus prunorum*, *Tyroglyphus farinae*, *Acarus dysenteriae*, *Tarsonemus sanguinarius* が認められている。

本症例は両例とも Tarsonemidae に属するものであつた。本蟲は胴長約 250 $\mu$ 、幅 120 $\mu$  で、円筒状を呈し、前方は稍々急に、後方は徐々にほそる。眼は 1 対、歩脚は前後左右の 4 群に分けることができる。脚端には爪をそなえる。胴並に脚には長短の剛毛を備える (第 1 図)。

卵は楕円形で、蛔虫卵よりはるかに大きく、約 90 $\mu$  × 50 $\mu$  を算し、卵殻は 1 層ときに 2 層で、卵殻内は顆粒状物質で満たされる (第 2 図)。



第 1 図  
糞便中の喰腎  
血蟲の成虫

第 2 図  
糞便中の喰  
腎血蟲の卵

従来、糞便中に本蟲が証明された臨床例は第 2 表に示すようであるが、本蟲の病原性の有無については今日に到るもなお明らかでない。

第 2 表

報告者	報告年	例数	症 状
大石房次郎	1894	2	劇腹痛、血便
芳賀栄次郎	1894	1	黒色テール様便
原田元次	1909	1	貧血
竜野 清	1909	3	食欲不振、心悸亢進、貧血
Tiéche	1910	5	一時的腸内寄生を証明
田中義雄	1912	4	何れも 30 歳以上の女性
今井 潔	1912	1	蛔虫駆虫剤に影響されない
北村 勝蔵	1915	21	一時性腸内寄生
栗 篤 吉	1915	6	偽性寄生虫
Reye	1919	1	活動性体内寄生虫
Westphalen	1924	1	腸内にて産卵
Wertheimer	1925	50	病原性なし
三浦操一郎	1926	1	下痢、ザロールにて駆除
川井銀之助	1928	1	腸内寄生を否定
Schelcher	1936	44	腸炎、消化不良
井田 博	1936	22	駆除しないときは再発生
橋本喬, 他	1936	1	下痢
野平安芸雄	1938	1	家兎実験
田中 宏	1940	8	病原性寄生虫

本蟲が真の体内寄生であることを否定する学者 (Reye, Wertheimer, Schelcher 等) の根拠とするところは、健康者の尿及び糞便中から本蟲を発見しても、その摂取食品中からも本蟲が証明されることによるのである。併し



これらに対して実験的の根拠があるわけではなく、*蠱*体の存否にのみとられ、血液所見、その他の一般状態に対する詳細な研究はされていない。藤井(1940)はこれ等の点を詳細に研究し、本蠱の病原性を確認した。なお阿部(1949)は家兎試食実験を行い、*嚙腎血蠱*を試食した後に、その大半は1~2日目に糞便中、一部は種属の如何に拘らず3~6日目に尿中に確実に出現し、剖見所見からも蠱は一時的及び持続的に内部寄生を営むことを明らかにした。又消化管から尿路への移行経路としては腹腔内及び心臓血内に発見される例数が僅小で確実ではないが、主要な通路として血中から腎盂乃至その隣接部位に運ばれて該部を穿通、尿路に下降する可能性が多いことを認めた。

本症例においては、含蠱味嚙摂取を遮断したところ、糞便中では9日後、尿中では16日後においても、なお虫体又はその一部が証明されたことから、体内寄生が可能であることが想像できる。

## む す び

含蠱腎血蠱白味嚙摂取により惹起された嚙腎血蠱症の2症例を報告した。第1例(尿及び糞便中の生蠱を証明)は該味嚙摂取遮断後、尿中では16日、糞便中では9日後においても、又第2例(糞便のみに生蠱を証明)は5日後においても、なお本蠱を証明した点から、本蠱は一時的腸内寄生が可能であることを認めた。

御校閲を賜つた戸菊教授に深謝いたします。

本論文の要旨は日本消化機病学会東海地方第14回例会に発表した。

## 文 献

- 1) 阿部清雄(1949)：所謂嚙腎血蠱の実験的研究，日本泌尿器科学会誌，40，4，62。
- 2) 藤井隆(1940)：所謂嚙腎血蠱症の研究，第1篇，臨床的研究，其の1，自家症例並に文献的統計観察等に就て，京都府大誌，30，497。
- 3) 藤井隆(1940)：所謂嚙腎血蠱症の研究，第2篇，所謂嚙腎血蠱の人工培養に関する研究，京都府大誌，30，769。
- 4) 藤井隆(1941)：所謂嚙腎血蠱症の研究，第3篇，実験的研究，京都府大誌，31，159。
- 5) 藤井隆(1942)：所謂嚙腎血蠱症の研究，第4篇，所謂嚙腎血蠱に関する研究，其の1，生物学的研究，京都府大誌，32，1389。
- 6) 原田元次(1909)：日本に於けるドメステクス虫の一実験報告，中外医新報，1381。
- 7) 芳賀栄次郎(1894)：蠱虫は悪性貧血を誘発する原因となるか，東京医会誌，8，121。
- 8) 橋本喬，他(1936)：

所謂嚙腎血蠱の研究(第3報)，北越医会誌，51，1220。
- 9) 今井潔(1912)：ドメステクスに就て，北越医会誌，27，335。
- 10) 井田博(1936)：尿及び糞便中に現われたるカビとダニとの関係，臨床日本，4，981。
- 11) 北村勝蔵・栗篤吉(1915)：人の糞便中に見出さるるチログリフィデエ科に属するミルベの虫卵，仔虫及び成熟虫に就て，医新聞，1915，289。
- 12) 金俊嗣(1924)：人の糞便中に見出せる蠱の卵に就て，朝鮮医会誌，46，478。
- 13) 岸田久吉(1923)：*Nephrophagus sanguinarius* Miyake et Scriba の分類上の位置，附麦粒のダニの学名，動物誌，35，203。
- 14) H. Miyake u. J. Scriba(1893)：*Nephrophagus sanguinarius* ein neuer menschlicher Parasit in Urogenitalapparat，Mitt Med. Fak. Tokyo，3，1。
- 15) H. Miyake u. J. Scriba(1893)：Vorläufige Mitteilung Über einen neuen menschlichen Parasiten，Berl Klin. Wshr.，374。
- 16) 三浦操一郎・川井銀之助(1926)：腸蠱(又は嚙腸蠱)に就て，日消化会誌，25，63。
- 17) 野平安芸雄(1936)：所謂嚙腎血蠱症に関する知見補遺，日医新報，1936，4279。
- 18) 大石房次郎(1894)：腸蠱虫，中外医新報，1394，1413。
- 19) Reye(1919)：Milben in den Fäzes des Menschen，Dtsch. Med. Wshr. 1919，1026。
- 20) Shelcher, R. (1928)：Ueber Milbenbefund in stuhl, Arch. Kinderhk, 83, 214。
- 21) 田中宏(1938)：飼養家兎尿中蟬供覧，皮尿誌，43，633。
- 22) 田中義雄(1912)：ドメステクス虫の鏡検法に就て，順天医会誌，471，137。
- 23) 竜野清(1909)：所謂ドメステクス虫に就て，中外医新報，1909。
- 24) Tiéche(1910)：Ueber massenhaftes Vorkommen von zur Familie der Tyroglyphidae gehörenden Milben im menschlichen stuhl, Zbl. Bakter. Orig., 54, 32。
- 25) Westphalen H. (1919)：Milben in den Fäzes des Menschen, Dtsch. Med. Wshr., 1333。
- 26) Westphalen, H. (1924)：Milben in den Fäzes des Menschen, Dtsch. med. Wshr., 175。

## Summary

In this paper the author reports two cases of nephrophagiasis due to *Nephrophagus sanguinarius* occurring in 'mise' (beam paste).

In the first case, aged 20 years medical student, showing the living tick in its urine and feces, ticks were found at 16th day in feces after taking of beam paste. In the second case, aged 22 years male student, showing the living ticks in only its feces, they were recognized at 5th day in feces. These facts above-mentioned indicate the possibility of their temporary parasitism in the human intestine.